

404

迫る世界大戦の危機

列強の建艦競争 尖鋭化する

特 248

913

木 徹 郎 著

院 書 陸 大

10
3
2

1



* 0057788000 *

0057788-000

特 248-913

尖鋭化する列強の建艦競争

鈴木徹郎・著述

大陸書院

昭和13

AJG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

404

— 迫る世界大戦の危機 —

列強の建艦競争 尖鋭化する

院書陸大

特 248

913

木徹郎 著

10
17

3
2

特248
913



鈴木徹郎著

尖銳化する

列強の建艦競争

迫る世界大戦の危機

亞細亞出版社



— 目 次 —

- 一、逼迫せる世界情勢……………(一五)
- 二、持つ國と持たざる國の相剋……………(二〇)
- 三、持てる國・英國……………(二三)
- 四、軍擴へ驀進する英國……………(二七)
- 五、宿命に立つフランスとドイツ……………(三一)
- 六、小協商國の動き……………(三五)
- 七、戦争はもう始つてゐる……………(三〇)

尖銳化する 列強の建艦競争

鈴木 徹 郎

逼迫せる世界情勢

世界には、今二つの大きな低気圧の中心地が現れてゐて、何時この中心地から動亂への點火を見ないとも限らない情勢にある。そしてこの逼迫した情勢は日を追うて險惡化してゐる。

二大低気圧の中心地とは言ふまでもなく、歐洲における波高き地中海と、極東に於いて支那を繞る太平洋の怒濤である。

スペイン問題を繞る歐洲は、獨伊の防共陣營に對する英佛の對立と独自の立場から臨むソ聯

といふ舞臺面で、その間に介在するところの諸小國は、その去就に迷ひながら自己保全を圖ることに現在奔命しつゝある。が、かくてスペイン問題に對する列國の虚々實々の外交は、洵に複雑微妙で、何時事態は急轉惡化せずとも測り識れず、一步誤れば歐洲の大戦となる危険が充分に伏在してゐる。

スペインの内亂は、今日に於ては既に地方問題と化した觀を呈し、歐洲は今小康を得た形で、政治的にも一應鎮靜したやうではあるけれども、これは明かに一時的小康でしかなく、各國共多數の義勇兵をスペインの戦場に出し、また武器軍需品を以て、夫々兩交戦團體を援助して居る現状から見ても、スペインの内亂は、スペインを舞臺とする、思想的に對立した國家間、或は利害相反した國家間の一種の國際戰であると見るより外はない。

歐洲に於ける現下の國際關係が不氣味な沈黙を守つてゐて、武力の抗争こそやつてはゐないが、火花を散らすその外交戰、或は思想戰を見るとき、依然それは危険信號の赤であり、將來は決して明るいものではないのである。

極東に於ける日本對支那の事變も徹底的支那の敗退と、日本の正しい主張の前に轉て明るい

極東の天地は開けんとはして居るが、この日支事變は既に日本對支那の問題だけではなくつて來て居る。

滿洲事變によつて、一旦堤を切られた日本の大陸發展の流れは、今次の事變によつて更にその勢を増し、決河の猛勢を以て、東亞大陸の上に横溢することになつた。

このために自然極東への進出と、日本への牽制や重壓を以て、主要な目的とする歐米の極東外交は、日本の大陸政策と兩立することは絶対に許されないのである。

だからこそ、極東のこの風雲に對處し、ソ聯は最近海上の防備に全力を注ぎ、國境の要塞化に日夜焦つたり、一方英國はアメリカを誘つて、シンガポールに於て英米共同作戦演習を行つたり、極東への生命線たる地中海が英國にとつて恃み難きものであることを悟つた彼等は、萬一に備へてアフリカの南端喜望峯迂回航路の安定強化に着手するなど、たとへそれが外交的ゼスチュアールであるにせよ極東の空氣はたゞならぬ情勢にある。

今次の事變に對して自國の既得權益の擁護といふ立場から、事變勃發以來、積極的な對支援助を敢てする英國に對し、日本が飽くまで武力に訴へるより外ないといふ考へ方は誤つてゐる

かも知れない。そして又血の嵐に慄くソ聯の現在の國內情勢から見て、日ソ兩國の關係が危機に直面してゐるとは考へられないかも知れない。が、我々は何時彼等と戦火を交へる時が來ないとも限らないといふことは充分覺悟してゐなければならぬ。

要するに極東の危機とは第一に、支那の長期抗日陣營を躍らすものが、支那共産黨であつて、その結果するところは、遂に、日本と赤化した殘存支那の對立拮抗にまで行く可能性が充分あるといふことであり、第二には、支那を破局に向つて導きつゝあるソ聯がその動力とするものは英國であつて、東亞の事態に對する英國の自覺こそ、極東を動亂に導くか否かの重大な役目を持つものであるといふことである。

斯くみて來る時、日支事變の將來は、單なる日支間の紛争に非ず、これは世界大戰後の一つの大きな轉換期の表現であつて、事變そのものの一應の解決を以つて終局とするものでは決してないと思へる可きが今日の常識であつて、歐洲大戰後混亂した世界の氣勢が安定するまで、今次事變の安定は期し難いと考へるべきである。

こゝで我々が注意しなければならぬことは現下の國際關係にあつては、歐洲の危機と云ひ

極東の風雲と云ひ、それ〴〵個立したものでないものであつて、獨逸が立てば日本も共に立つ、英國を立てば佛蘭西も立ち、ソ聯も立つ、かくて歐洲の危機は直ちに極東の危機であり、極東の危機も又歐洲のそれであり、世界は危機の一色に塗り潰されてゐることになる。

殊に自國の半球に隔離し、傳統のモンロー主義の殻の中に閉ぢ籠つてゐた米國が最近傳へられるところによれば、彼等は歐亞の逼迫せる情勢に鑑み、英米間に或る種の協定を結び、アメリカ極東艦隊の強化を目的にパナマ運河の擴張を計り、一方目下優秀船建造計畫を練つてをり、且つルーズヴェルト大統領は特別教書において四十二隻といふ驚く可き最優秀船の建造を主張すると言はれてをり、彼等が意圖する所がたとへ何れにあるにせよ、非常に緊張した動きをしてゐることは何としても見逃せないものであり、全世界は極東と云はず歐洲と云はず全く戦争の危機にさらされてゐるのである。

世界の氣勢の逼迫したこの現状をみて我々が何とかして世界の安定を望むためには、是非各國は夫々各自の立場から、一應の決戦を必要とするかも知れない。即ち世界は新しい時代に向つての總決算をしなければならぬかも知れない。我々は世界情勢が一様にその總決算の秋

一〇
へ向つて刻一刻と進んでゐるのであるといふことをはつきりと認識して今後に處してゆかなかければ、悔を千載に残すことになる。

持つ國と持たざる國の相剋

世界大戦を契機として、人類に恒久平和希望の聲が起つたのは當然であるが、その平和維持の機關としての國際聯盟に、平和維持の實力がなかつたことは既に幾度か證明し盡されてゐる。もと／＼國際聯盟といふのは、大戦に於て聯合國が四年半もかゝつて、死力を盡してドイツを打ちのめしたそのままで、戦勝の現状を永久に守らうとするやうに出来てゐたのであるが、こんなものは時々刻々變動する人類社會の發展法則を全く無視するもので、そこには抑へ切れない無理があつた。

伸びねばならない有爲なドイツ民族が、いつまでも聯盟の桎梏下に在り得よう筈のものではなく、結局持ち餘る國に對して當然の要求を叫んでヒットラーは立ち上つた。次いでイタリアも持たざる國、伸びねばならぬ國である、ヴェルサイユ條約に不満を抱いて、遂に聯盟脱退を

敢てした。

ドイツ、イタリアと國情を同じくする日本も、支那の不當な侮日、抗日に對應し、滿洲事變の勃發を見、聯盟脱退の餘儀なきに至つたのである。

かくて今や東西國情を同じくする日本、ドイツ、イタリアの三國は、現状を飽くまでも固執し、新興勢力の進歩發達を遮げんとする諸國に對して、敢然と立つに至つたのである。

歴史に輝かしい記録を残すべき日、獨、伊の三國防共協定は、世界の推進力として、こゝに結ばれたのである。そして一方に世界を赤化の怒濤に捲き込まんと、革命以來の主義を捧ずるソ聯に對して、鐵壁の陣を敷いて居るのだが、この陣營こそ正に世紀の偉觀と云ひ得るものであらう。

人間社會に貧富の差があるやうに、國家と國家の間にもそれがある。充分な領土を持ち、豊富な資源をもつて、有り餘る現狀に満足してゐる國もあり、人口は多く、領土は狭く、何等の資源も持たない國もある。

歐洲の列國に就いて考へてみても、英國や佛蘭西は現狀に満足してゐる國情にあるが、ドイ

ツヤイタリーは到底現状に満足は出来ない國柄である。又ロシアは廣大な土地と潤澤な資源を持つてゐる國である。が、ハンガリー等は一日も早く國際間の現状を打破して舊態に復し度いと念じてゐる國である。

最近傳へられる所によればイタリーのチアノ外相並にハンガリーのカンヤ首相、オーストリアのシュシュニツク首相は、ハンガリーの首都ブタペストに會議を開き、フランコ政權の承認や、對聯盟態度の再檢討、日獨伊防共協定への參加等を協議したとのことであるがハンガリーの望むところもその國情からして洵に無理もない。

ドイツやイタリーは各々その國內に有り餘る人口を持つて、國民の勢力が張り切つてゐても、現在の世界は到る處に繩張り引廻してあつて、新興國はさらに割前にありつけない、手足を伸ばす餘裕もない。そこに英國や佛蘭西のやうに豊富な植民地を持つ國と、ドイツ、イタリー或はハンガリーの如く物を持たざる國との間に對立が生じ、争の起る原因が潜んでゐるのである。

現在歐洲はかうして相刺する間柄にあるのだが、彼等が利害關係から互に相争ふことは決し

て最近に於てのみの現象ではなく、舊く歴史を遡つてみると、コロンプスのアメリカ大陸發見以來、歐洲に於ては多年の間繰り返して來た事柄である。

が然し現在の世界的對立は時代的にこれをみると、十九世紀に富を積んだ英佛又はロシアに對し、二十世紀の新進國が相對してゐるといふ形である。そして貧富の對立に合せて、「持てる國」を覗つてゐるといふ感情的問題から思想的の對立にまで進み、ドイツ、イタリーが手を持つて起てば、フランス、ソヴェトが呼應して拮抗する。自衛手段の外交弄策から、互に利用し合ひ度いといふ便利主義から、英ソは友好關係を結び、或程度の協約を爲す、といふ現状にあるのである。

この情勢下に喘ぎつゝ世界の各國は何時戦争へ一齊に動員されぬとも測り知れぬ事を充分覺悟して、夫々國內戰時體制の強化を急ぎ、必要以上の軍備を敢行し、有史以來の緊張裡に噴火山頂を進行してゐるのである。

持てる國・英國

かうして既に運命づけられた國際狀勢こくさいじやうせいの下に於ける列強の動向を、出来るだけ正確に把握し、それに對處して行くことは、東洋の安定勢力を以て任ずる我々日本國民として義務であり、責任でもある。先づ順序として英國から究明してゆかねばならない。

現在の英國を一言で批評するならば、英國は今日「理性を失つた國」であると言ふのが一番適切な言葉であらう。世界に誇る老英大國は今、朝野を擧げて理性を失つてゐる。

この英帝國とは、本國と五ツの自治領じちりやう(カナダ、濠洲、南阿聯邦、愛蘭、ニュージーランド)に印度を加へた三千五百万平方軒といふ龐大な領土りやうどを保ち、五億に垂んとする人口を擁し、世界最大の海軍を誇つて七ツの海を遊弋するところの世界最大の「持てる國」が即ちそれである。

元來このさいこく英國は、その自治領にはウインザー王朝を戴いてそれ等の自治領は名目上獨立國であつて、本國と對等の地位に立つてゐる。が、然し英帝國の國防や外交はロンドン政府が運行してゐるのであるから、觀方に依つては英國といふ國は内部が數個の獨立國で、外に對して一ツのブロックを形成するものであると見ることが出来る。だから觀方によつては不思議な國だといふことも出来よう。必然的に其政治の形態も、外交も、或は國防の方針も複雑極

まり、千變萬化で、容易に我々が端睨するこの出来ない現象を呈するのは當然である。

然しながら、英帝國の國是こくぜいといふものは數百年來一貫して微動びどうだもしない。要するに商工業で生活を立て、原料品と食料とを海外(主として自國領土より)に仰いで、石炭と製造品を外國に賣りつけ、之が爲めに多數の商船しやうせんを維持し、浮動せざる通貨を有し、植民地を世界到る處に設けて、而してこれを護るに世界最強の海軍を以てする。

この一貫した國是は生きる英國であるからこそ、彼等にとつて植民地と海軍かいぐんとはその生命とするものであつて、それ故に公海の自由は彼等が繁榮の第一要件であり、海軍は彼等が生存するための核心勢力かくしんせいりきよくであることは勿論である。従つてこの海軍と植民地とを失ふ時は英大帝國に太陽の没する時なのである。

かやうに英國は歐洲に在り乍ら、他の大陸に依存いぞんしなければならぬ國である。地球上の到る處に利害の對立する相手を持つことにもなる。爲に地中海の形勢に一日たりとも無關心である譯にはゆかず、極東きやくとうに於ても又日本の進路に邪魔をしなければならぬやうなことにもなる。こゝに英國が現下の目まぐるしい世界情勢に關し晏如たり得ざる原因があり、彼等が今日

理性を失つて狂奔する姿態が理由づけられるであらう。

由來英國といふ國は世界に向つて、國際聯盟を楯にとり自國の權益を擁護する立場から平和の押し賣りをして來た國である。世界大戰の後に於て、英國は平和の維持を決心し、そしてそのためには國際聯盟の力によつて、これを支持してゆくことが最も有効にして安價だと考へた。が、歴史はいつまでも同じ様な頁でありやう筈がない。やがて國際聯盟は威力を失ひ、歐洲の二大勢力は益々對抗の姿勢となり、事態は最早や國際聯盟の機構を以てしては救はれず、自ら武装するより外に途は無しと悟つた彼等は増税と赤字公債を以て世界最強の空軍の建設に全力を挙げ、國運を賭して世界最大の海軍力充實へ向つて驀進することになつて了つた。

かくてバイブルを武器に代へて自國の世界に於ける勢力を保持してゆくより他に途なしと悟つた英國の昨今の軍擴熱に關して、日々に傳へられる彼等海軍の擴張や、國防の強化は物々しいものではあるが、彼等には國內に一つの大きな悩みがある。

廣大無邊な版圖を擁し乍ら、これを武力で彼等が守つてゆくことは容易なことではあるまゝ。如何に富強英國の力を以てしても、自治領の援助を俟たなければ世界第一の武力を維持するこ

とは出來まい。だから自治領をして本國を支持させ、外交の上にも、國防の上にも眞に一身同體の機能を發揮させることが必要である。

然し乍ら現在國防充實といふ見地にも英本國と植民地との間に意見の相違があるやうだし、通商、海運の問題等では一層厄介な衝突の虞がある。原料を輸入し、製造品を賣込むことを本位として、先進工業國たるの特權を極度に主張するイギリス本國が、次第に成長しつゝある自治領を何時まで植民地扱ひにし得るか問題である。これこそ彼等英國の掩ひ切れぬ大きな悩みである筈である。

軍擴へ驀進する英國

我々が今日英國に對して與へる言葉は、或る者は老衰せる帝國と評し、或は悩む英國だと云ひ、或るものは平和維持の輝く帝國だと叫ぶ、その何れでも我々は構はない。現實に見る彼等の行動に對しては警戒しなければならぬ幾多の問題が展開されてゐる。

眼前に現れた英國の國防不安は、北海に於てドイツに對し、太平洋方面に於ける日本の躍進

や中部、東部アフリカにおけるイタリーの進出に極度の脅威を感じてゐるといふことである。従つて昨春議會に提出された國防充實計畫は、陸海空の三軍に互る全面的軍擴案であつて、向ふ五ヶ年間に國防費總額二百五十五億圓(時價)といふ驚く可き數字であつたが、俄然、本年に至り更に加へて國防豫算の増額が来る可き四月の議會に提出されるといふからその國防費は益々驚異的數字を示すに違ひない。而もその豫算を各自治領にも敢て割當てるといふことである。

目下陸海空軍の各専門家はビルマ、シンガポール、オーストラリア、マレイ方面を視察中で、オーストラリアの防備については西海岸のフリーマントルに強力な海軍根據地を新設することとなり、空軍は米國の工場から多數のモーターの供給を受けて急速に大擴張の準備を進めてゐる。又このオーストラリア海軍とシンガポール軍港との協力も強化される筈であつて、専門家は各戰略地點の能力を強化し、その地點を中心とする一定地域内には大小の修理ドックや燃料供給所を新設する計畫も進められてゐる。

シンガポールの北方バクチャン河附近はマレイ半島中最も狭い地峽をなしてゐるが、英國と

しては日本がシヤムと秘密協定を結んで、この地點に運河を開鑿するのではなからうかといふやうな猜疑までしてゐる。

萬一日本とシヤムの協定のもとに運河が完成された暁には、日本海軍がシヤム灣から直接印度洋に抜け、英領ビルマや印度を攻めることが可能となり、一方歐洲に於ける日本との同盟國が日本の援助に赴くことが容易となる譯で、シンガポールは一大脅威を感ずると彼等は觀てゐる。

この運河の完成には五年乃至十年といふ日時が必要とされるかも知れないが、若し日英戦ふの情勢に立至れば、日本は必らず此の實行に急ぐとみて、英政府はその場合をまでも考慮して、これが對策を検討してゐるといふ用意周到振りである。

更に又、西方印度からアデンを経て、東アフリカ海岸に沿ひ、アフリカ南端喜望峰を迂回して大西洋に出る線に就いては、英海軍省は海、空軍の増設を計つてゐるが、これはイタリーの進出により、地中海を経由するインド方面への通路の安全が保障され難くなつて來たため、その對策としてアフリカの英領シエラレオーネのフリータウン港が海軍の根據地として將來活

用されることになった。

こゝで我々はシンガポールを中心とする英米陸海空軍の総合大演習に就いて覗う必要がある。

この演習にはシンガポール船渠竣工祝賀式に参加するといふ名目の下にアメリカ巡洋艦三隻と、それに加へてオランダ軍艦十四隻、フランス巡洋艦三隻等が参加してゐるのだが、名目は何であつてもいい、この演習は要するに將來英米海軍の大平洋上に於ける共同行動を暗示するもので、極東の危機を前にして英米兩國が次第に提携しようとする情勢にあることは大きな問題である。

英國の老獪な外交がアメリカをこゝまで引張つて來たことは一面偉大な功績と云へるかも知れない。

恐日病に犯され、地中海その他の國防不安に理性を失つて再軍備擴張に急ぐ英國が若し一刻も早くその理性を取り戻し得ず、徒らに自己保全の立場から對立國の神經を高ぶるやうな行動を取るとしたら、世界大戰の導火戦は英國に在ると見るより外はない。

前述の如く英國は世界の大帝國である。多年養ひ來つた底力で、世界和平の鍵を握つてゐることは疑ひはない。世界和戰の決は實に英國の態度にかゝる。だから今後の戰爭を論ずるには、どうしても英國の動向を先づ第一に見なければならぬのである。

宿命に立つフランスとドイツ

フランスの行く道は、英國との聯繫を益々緊密にして、アメリカの支持を飽くまでも求めてゆかなければならないといふことである。

フランスがドイツと對立し抗爭することは歴史的に運命づけられた問題であつて、何百年來フランスとしては東方のドイツから脅威を受けてゐることになる。ドイツの實力が日毎に加はつてゆく今日、フランスは是非共に備へなければならず、將來益々フランスとしてのこの重壓は募る一方である。フランスとソ聯は一九三六年から立派な同盟國であるが、フランスがソ聯に對して内心信頼の念を持つてゐないやうだ。然るにソ聯と握手し、チエツコスロバキアとの同盟を必要とし、英米との聯繫に全力を注がねばならない原因は要するにこの東方からの

ドイツの脅威に外ならない。

従つてフランスの外交は、その最大眼目とする所がドイツであつて、觀方によれば簡單である。何故かと云ふに、ドイツに對して自國の國際的立場を如何に有利に導くかがフランス外交の最大關心事だからである。

ソ聯に對するフランスの眞意は前述の如くフランスとしてソ聯に對し、差したる信賴の念を持たないと云ふのが正しい觀方であつて、それだけにモスコイとしても同盟こそ結んでゐるがフランスに對して餘り頼みには思つてゐない筈である。こゝに佛蘇の今後の關係は別として、只フランスはドイツへの對策上、その方便としてモスコイへ手を延ばしてゐるに過ぎないことは略々明白である。

對立相刻の影を浮べて永久に流れるラインの河はフランスにとつて洵に宿命の河と云はなければなるまい。殊に最近ドイツとイタリイが固く手を握り、これに日本が加つて、世界の推進力として進む三つの鼎に對して、ドイツに對するフランスの不安は英米への依賴心を一層深からしめるものである。

現在歐洲には、明日にも爆發するといふやうな危機は見えず、一時的の小康情態にあるけれども、そして又パリ、ロンドン樞軸とベルリン、ローマ樞軸は寧ろ對立でなくして、接近せんとするやうな情勢にあるけれども、日獨伊の防共協定は、最近これ等歐洲の各國に於けるデモクラシーの再検討と懷疑となつて、フランスを初め、ベルギー、ポーランド、ルーマニヤ、ユーゴスラビヤなどに左右抗争の兆が現れ、第二のスペインがいつ起るかも知れぬ形勢にある。この新事態に最も悩むのはフランスであつて、一時的の小康を呈してゐても結局動亂勃發の危機は時と共に内面に迫つてゐると觀るより外はない。

スペインの内亂は、歐洲戰爭をスペイン領内で縮圖にした觀のあつたこと、歐洲の列強がこの革命に對して好むと好まざるに拘らず、それらの立場から三通りの態度に分れたことは、我々が周知の事實である。

數年前からファツシヨ反對といふ看板を掲げ、ファツシヨに反對する凡ての勢力は團結しろ、と世界へ呼びかけてゐるロシヤと、ドイツ、イタリイの取組みと、パリ、ロンドン樞軸が即ちそれであつたことは前にも述べた如くである。

目下ドイツは四箇年計畫の實現に全力を擧げてゐるから敢て冒險は欲しないにせよ、或はソ聯との間にしても差し迫つた問題がないにせよ、ドイツ側から考へれば、スペインに於けるフランコ政權の成立は、フランスの勢力を大いに制肘せしめたことになり、ソ聯の西歐進出を防いだ偉大な功績である。これはフランスにとつて、ドイツに對する脅威の倍加を意味することになる。

歐洲に於ける英佛對ドイツ、イタリーの關係が最近接近せんとしつゝあるとは傳へられるが、それは英佛合作に依るところの自國の立場を保持しつゝ歐洲を大戰前の國際政治の原則へ復古させようといふ勝手極まるものに外ならない。

昨年十一月末の英佛會談の結果、英佛はドイツに對して植民地返換と交換に軍備縮小、聯盟復歸、中歐東歐諸國不干渉等を誓はしめ、イタリーに對してはアビシニヤ併合承認と交換に、地中海、軍縮問題等を讓歩させようとした。

そのあとがどうかといふと、日獨伊防共協定の結果フランスは右三國協定を以てベルリン、ローマの中歐、東歐におけるヘゲモニー掌握へ拍車をかけるものとし、一方英國にすがりつく

と同時に他方所謂フランスの衛星國と見なされる小協商國乃至ポーランドの獨伊接近をさまたげ、あくまでフランスは英國のバックに依つて、彼等小協商國が獨伊から受ける危険を防ぐから、彼等もいつまでも親佛的であつて欲しいと説き歩いたのである。

かくて英國に依存するフランスは、英國の傀儡となつて極東に於ける問題にも、目下支那事變の處理につき奸策を練つてゐて、日本が軍需品その他の物資を入手することを實質的に困難ならしめ、同時に支那に對しては巧妙な方法でクレヂット其他の便宜をはかるものと傳へられる。

小協商國の動き

歐洲の中央にはチェツコスロヴァキア、ユーゴスラビヤ、オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラビヤ等多數の國が互に城壁を高くしてゐる。

世界的經濟的不安、ドイツ、イタリーの強大化、經濟的進出、英佛デモクラシーの無能、ソヴェトの脅威、こうした理由で、小協商國はこゝ數年來たゞならぬ動搖の色を示し、ポーランドはフランスと軍事的にも財政的にも密接な關係を結ぶと同時にドイツとも不可侵條約を結ん

であるし、ルーマニアでも親獨傾向は最近強まり、カール國王を獨裁者とする獨伊型政治組織の出現を見た、更にユーゴスラビヤも従来犬猿の仲だったイタリーともドイツの仲介で友好關係は益々進展してゐる。

しかもこれ等三國はいづれも共產主義の脅威を感じる點で、また經濟的關係でも獨伊の群に投ずる傾向にある情態である。

若し強國同志の間に争ひが起つた場合、これ等は果してその何れに味方するかは明らかでないにしても、恐らく最も賢明な中立的態度をとるであらうことは、今日の情勢からして察せられる。

チエツコスロヴァキアのみは眞のフランスの友であつて、この國はロシヤとも結んで、民主主義最後の線を守りつゝある。彼等は少數民族問題ではドイツをはじめポーランド、ハンガリーから脅かされ、更に又他の小協商國との關係も悪く、その分裂は何度も報道されたものである。

かくして獨伊結合の強化につれてダニユーブ諸國への經濟的觸手もグン／＼伸びて行つた。

それでフランスはこれが敵軍に渡されてはと、小協商國間の行脚となつたのであるが、果してフランス外交はこの行脚に多くの事をなし得たかは頗る疑問である。この行脚の行はれてゐた最中ユーゴスラヴィアの首相兼外相ストイヤデイツチのローマ訪問、ベルリン訪問等の豫定發表となり、益々フランスとしては神経を高めなければならぬやうなことゝなつた。

英國が企圖し、目下盛んに工作を續けてゐる獨伊を英佛に近づかしめ、結局は英、佛、獨、伊間の完全な一致で歐洲の平和を得ようとの運動は、今後何う展開されるか、日獨伊防共協定によつて、獨伊と密接な關係にある日本も、この動きに對しては深甚の注意を向けることが必要である。

勿論英國はフランスと共に日獨伊の防共協定に大いに反對組であることは明かで、何故この「共產主義反對」の防共陣に英國が進んで反對するかといふと、それは英國が防共協定を以て現状變更協定とするがためである。彼等がかく見るがために現状維持を以て自國の利益とし、自國の打算に合致するものとして固持しようとする立場からの反對であることに間違ひはな

若しソヴェト政權が主張して來つたところの資本主義及び帝國主義の打倒、弱小民族の解放といふやうな運動に對してなら、英國こそ他國に先き立つてソヴェトに對して反對しなければならぬ。何故かといふに英國こそ、米國と並んで資本主義の双壁であり、世界の富の大部分を占有してゐるからである。

又英國こそ、人口僅々四千萬に過ぎない小島國を以て、人口五億といふ大領土を支配し、しかもその中の白人數は八分の一に過ぎず、大半が黄色人種、黒人等の有色人種から成つて居り、英國こそ實に所謂帝國主義、膨脹主義の手本だからである。

こゝに現實の前には主義も理窟も構はないといふ英國獨争のゆき方が窺はれる。

次にイタリーとドイツの關係に就いて一應見る必要がある。といふのは即ち述べた如く、國情を同じくし、同一陣營に立つ現在の兩國であるが、一體イタリーとドイツが肝膽相照らす仲になつたのは、決して舊いことではなく、先づ一昨年の秋頃からのことと考へてよ。

イタリーと云ふ國は現在頗る有利な立場に居る國で、何故有利な立場にあるかといふと、それには二つの理由がある。第一に共產主義の勢力が歐州に進出する危険を虞れてゐる者は、資

本主義を防衛する仲間としてファツシヨのイタリーに多分に同情を持つてゐることである。第二にイタリーとドイツが握手することはフランスにとつて重大問題であるから、フランスは極力妨げようとする。このフランスの介在が、ドイツとイタリーの不可分關係へ進む好條件を造る原因ともなるといふことである。

ドイツ、イタリーが更にどういふ點で一致してゐるか云ふことは、こゝに言ふまでもなく、第一にロシア反對の態度であつて、兩國共に歐洲文化を擁護するためにソヴェトの勢力を驅逐しなければならぬと主張する、第二には歐洲の老國たる英佛の二國と、その家來のような小國勢力が新興國の前途に立ちはだかつて居るから、現状を維持するための國際聯盟など叩き潰さなければならぬ。

此の形でゆく限り英國とソ聯とフランスとを相手國として行動しなければならぬのは當然のことである。

歐洲における諸小國がドイツ、イタリーを信頼して、漸次その陣營に趨らんとする傾向にあることは、當然の歸趨とは云へ、この陣營の一角を守る日本としても慶ぶ可き現象と思ふ。

戦争はもう始つてゐる

世界を戦争へ暗示する潮流には二つある。世界を擧げての軍擴熱とこれに加へて、ニューヨークから始まつた世界的經濟不安の襲來がそれである。

不景氣の暗雲はニューヨークから歐洲方面へ襲ひつゝあり、その先驅は既に歐洲に於ける失業者の増加を示して居り、或は一九二九年のパニックの再來ではないかと財界は不安の色を漂はしてゐる。

世界經濟打開といふ名目のため、英イーデン外相は特別經濟組織の創設を審議すべき機關の提唱を先般聯盟理事會に提出したのであるが、この組織はアメリカその他の非聯盟國も參加し得る性質のもので、この創設計畫は前ベルギー首相ヴァン・ゼーランド氏及びベルギー皇帝レオポルド一世の示唆に基くものである。

「世界各國が政治的に相對立するブロック群に分裂するのを阻止し、各國間の協力を確保するに努力する」

といふ目的から出發して居り、英國としては今後の對歐政策と同様極東政策に於ても、アメリカの協力を確保すべき手がよりとしてこれを極力支持すると見られるが、これは去る十一月三十日發表された英佛會談コムミュニケの精神と相反し、西歐諸國と親獨的傾向にある東歐諸國との間の連帶關係を弱め、又は破壊する結果を來たすといふやうな矛盾が存在するのである。とまれ歐洲各國が經濟不安の再來に焦慮し初めてゐることは國際政治の逼迫と共に惱み深刻なものがある。

この世界經濟不安の襲來に加へて、世界戦争への危機を叫ばしむる最大のものは何と云つても列強の軍擴熱である。海軍無條約時代に入つた第一年は各國夫々息を殺して相互に睨めつくらをしてゐたが第二年に入つた今年俄然列強は建艦競争のスタートを切つたのである。

奇妙なことにそのトップを切つたものが何れも三六年三月のロンドン新海軍條約參加國で、不参加國の日本だけは沈黙してゐるといふことである。

英國の軍擴熱に就いては既に述べた如くであり、フランスも四萬噸主力艦の建造は愈々事實となり、ソ聯も極東、バルチック、黒海、北洋各艦隊の整備に努力して居り、更に驚く可きは

戦争に最も超然たり得る筈の米國が、國家安全保持の必要を叫んで軍擴の波に乗り出したことである。

由來アメリカはモンロー主義を傳統的精神とする國である。歐洲の不安と云ひ、極東の危機と云ひ、獨り超然たる立場に安じられる凡ゆる條件の下にある國であるが、こゝ注意しなければならぬことは、歐洲の大戦にもそうであつた如く、後から出かけて利を得ようとするだけでは忘れない國であるといふことである。英國の如く理性を失つてまで動かないであらうが、吹く笛にともすれば軽く踊ることを我々は知つて置く必要がある。

大體的に云ふと、アメリカも英國も、彼等は共にアングロサクソン民族であり、英語を國語として話し、英文學を文學とし、英國の法律を以て律する從兄弟といふ關係の兩國である。而も彼等はデモクラシーを以て政治的信條とする點に於ても相共通してゐる。

斯うした民族的、政治的共通性から觀ても英米兩國の提携は充分可能であり、無論これにフランスを加へて、今後反ファツシヨ・プロツクか若くは、現狀維持聯合かを形成して來ることは明かである。

その現れが曩にはハル長官の聲明であり、今又シンガポール英米海軍共同演習への参加であり、軍擴への行進である。

米國ではルーズベルト大統領の國防特別敎書を去る一月廿八日議會に送付されたがその要旨は次の如くである。

「アメリカ政府が各國の主都において各國政府の首腦とともに軍備縮少の方途を發見し少くとも世界平和の可能性を確立せんと努力したことは議員諸君の熟知せられるところである。また政府のこの努力がアメリカ國民の希望に支援されて現在も依然繼續され且つ將來も引續き繼續されるであらうが、それにも拘らず現在のところこの努力が失敗に歸したことも御承知のことである。吾々は平和愛好國民として、各國間に軍備を制限し侵略を終滅すべき協定を達成せんとする積極的な努力を放棄しないであらう。しかしながらかかる協定達成の希望をまだ捨て得ないとは云へ、まだ協定の成立に至らぬ以上、われ々は自國の國家的安全を考へざるを得ないのである。

余は今日軍備が全く前例のない驚くべき率で増加しつゝあることを諸君に報告するのを最も

遺憾とするものである。現在交戦中の國々を含めて、今日大多數國家の大部分の國民が平和に暮さんことを望んでゐる事實にも拘らず、世界人口の少くとも四分の一が惨酷な破壊的な紛争に巻き込まれてゐることは、誠に不吉な事實といはねばならぬ。

現に極東においても歐洲においても戦争が起つてをり無数の無辜の民は空襲のため家を追はれ緊迫した空気が世界に漲つてゐる。各國が軍備を増大しつゝある現狀に照しアメリカ現在の國防が國家の安全を保持するに不十分であり、従つてまたかゝる理由に基き軍備の増強を必要とすることを議會に報告することはアメリカ陸海軍の總帥としての余の憲法上の義務である。アメリカ人の生活標準が高いためにアメリカの軍艦、大砲、飛行機の建造費、維持費並びに人件費が他國より高いことはよく知られた事實だが、他面また米國市民の總收入或は政府の總歳出に比しアメリカの陸海軍費の占める割合が他の列強よりはるかに低いことも又事實である。各國が世界の平和と安全を脅かす程度にまで陸海軍備の増大を圖りつゝある現狀に鑑み余は議會に對し次の諸點を勸告するものである。

一、總經費八億ドルをもつて現有海軍勢力を二割方増強する。

一、七月一日より開始される新補充計畫の第一年度においては二千九百廿萬ドルを支出して主力艦二隻、巡洋艦二隻の追加建造を行ふ。

一、經費一千七百萬ドルをもつて陸軍の裝備を改善する。

最近の歐亞情勢の目まぐるしい變轉にルーズベルト大統領は軍擴の益々必要であることと愈英米提携の必要であることを痛感せしめたものか、右教書の作成に先立つて、英米兩國政府間に或る種の祕密協定を締結し、歐洲並に極東に對する種々の協約が爲されたといふことは、たとへそれ等が英國の老獪な外交に禍されたアメリカ政府の輕舉であるにせよ、我々が今日最も重大關心事とするところである。

殊にアメリカ共産黨の大立物フォスター、ブロウダー、マイナー、トラハテンベルグの四名はモスクワよりの指令により急據極祕裡にモスクワに向つたが、その目的とする所はモスクワ政府は支那事變に對するアメリカの輿論が最近次第に干涉主義に傾いてゐるのに焦だち、これを動かし日本に對するアメリカの態度を一層積極化せしめることにあり、場合によつては極東の紛争に對し米ソ共同動作にまで進めんとするやうな意圖にあるらしい。ロシヤだけを考へ

てみても氷炭相容れざる日ソの間柄である、日本に對して表面日本の威力に沈黙を守り乍らも
どんな潜行運動を續けてゐるか測り知れない。

我々は凡ゆる場合を考慮して、今日の時局に相對處してゆく充分の心構えが必要である。ル
ーズベルト大統領の教書に見る如く「既に極東においても歐洲においても戦争が起つて居り、
軍備の増強を必要とすることは余がアメリカ陸海軍の總帥としての義務である。」と云ふこと、
而して新建艦案に基く増加總トン數は之を總て太平洋方面に向けるものであると云ふことはア
メリカ政府要人の語るところであるが、彼等が目標とするところは何處にあるかは之を以て充
分想像出來よう。

我々は世界に進む皇道の前途に何等虞れることのあるものではないが、「治に居て亂を忘れ
ず」と云ふ古訓に則り、現下の緊迫した國際危局に對する充分な心構へを必要とする。

セルビアの一青年が放つた弾一發が、當時の逼迫した歐洲の各國を忽ち戦火の渦中に捲き込
み、盧溝橋頭に發した支那兵の不法行爲が一瞬にして支那全土へ擴大されたことの事實を忘れ
てはならない、現下の國際情勢は世界戦争への可能性が凡ゆるところに伏在してゐて、一犬吠
ゆれば萬犬傳ふの状態にある。

▼出版部だより▲

▼難局多難の非常時に當り、吾が大陸書院は出
版界に華々しくデヴェューする事になりました。
幸ひ諸賢の御鞭撻と御指導とを得れば、金城鐵
壁、何卒御愛顧の程をお願いします。
▼本社發行のパンフレットは過去の新聞切抜的
のインチキを排し、内容の充實と著者の嚴選を
モットーとし、日々の社會、政治、經濟問題を
急速、詳細に皆様にお知らせす可くつとめて努
力する覺悟です。毎月七八點は發行する豫定で
すから末長く御愛讀下さる。

尖銳せる建艦競争 N.II.
定 價 十 錢

昭和十三年二月十六日印刷
昭和十三年二月十九日發行

著述者 鈴木 徹 郎

編纂兼 鈴木 茂 生

發行者 鈴木 茂 生

印刷所 民友社印刷所

東京市下谷區車坂町八九番地

發行所 大陸書院

電話下谷(83)四七六七番
振替東京七一、五二七番

全國配給所 亞細亞出版社

大阪市北區堂島上二ノ二五

京阪神特約店 新正堂書店

〔特約〕 東京鐵道局公認 (鐵道保養會・鐵道弘濟會・啓徳社)

各賣店・ホム・ム・街頭新聞・スドン・有名書店・リア

近刊豫告

(送各料册三錢)

大野 慎著

革新日本精神の根源

定價十錢

豊島信一郎著

赤色ロシアの國民生活

定價十錢

鈴木徹郎著

尖銳化する建艦競争

定價十錢

島田俊雄著

戦争に勝つ日本はうなる

定價十錢

亞細亞出版社

月刊 每月一回一日發行 定價二十錢

漫畫情報

◎時局が一目で判る!

◎數十冊の高級雜誌讀む必要なし!

東京市下谷區 亞細亞出版發行 電話 四七六七番 振替 一七五二番

トツフンパ 刊既

大野 慎著 定價廿錢

戰時議會と政局の新動向

尾瀬 敬止著 定價十錢

各國女兵士の出現

鈴木 治朗著 定價十錢

ソ聯の國境を衝く

島山 景三著 定價十錢

死の神秘相

尾瀬 敬止著 定價十錢

樺太國境の實狀

小松 孝彰著 定價十錢

現地を語る

月 刊 誌 雜

喫茶街を中心とした

スマートな流行雜誌

喫茶街

菊判總アートの豪華版

定價三十錢

時局が笑つて判る

日本唯一の漫畫雜誌

漫畫情報

下川回天編輯

漫畫界スターの總動員

定價二十錢

79
2

